

オリエンテーリングとの出会い

1970 年代前半、東京西郊を走る西武鉄道は、オリエンテーリングのもっとも熱心な牽引車だった。栄えあるパーマネントコースの登録番号 1 番は西武池袋線の元加治駅をスタートする。隣の仏子駅や高麗駅、秩父駅にもパーマネントコースがあり、初期の主要な大会はほぼすべて西武線沿線で開催された。オリエンテーリングの広告は駅や社内で常時目にする事ができた。

通学中に眼をとめたそれらの広告に興味を持ったのは、山好きの父母のもとで育った私にとっては当然のことだった。14 歳の時に初めて訪れた仏子のパーマネントコースでは、1 番ポストに 50 分を費やした。それでもオリエンテーリングが嫌にはならなかった。

それから 50 年、時々、「もしオリエンテーリングに出会わなかったら・・・」と考えることがある。人生は相当違ったものになったことは間違いないが、その詳細を想像することは難しい。オリエンテーリングは自分の人生と分かちがたく結びつき、そこから得られる苦しさも達成感も、すべては人生のごく自然な構成要素となっているからだ。

日本への導入経緯

1966 年 6 月 26 日、今ではミシュランの三つ星になった高尾山で、日本で初のオリエンテーリングが実施された。もっとも当時は「徒歩ラリー」という名称で行われていたし、その内容も今とはかなり異なっていた。

前回の東京五輪が行われた 1964 年、マラソンで銅、柔道やバレーでメダルが取れたものの、主力種目の陸上や水泳では「惨敗」というのが当時の評価だった。スポーツの発展には国民全体の体力の底上げが欠かせない。閣議決定に基づき、国民の体力を向上させる全国的な動きがスタートした。その一種目が、誰もが気軽にでき、ゲーム感覚で運動に親しめるオリエンテーリングだった。

なぜマラソンのように苦しい競技にのめり込む人がいるのかが新聞記事になる時代だった。大衆は競技スポーツの苦しさを敬遠する、そんなスポーツ感が支配的だった。だからゲーム風味を施したオリエンテーリングはその目玉となったのだろう。

発展の 1970 年代

その後のオリエンテーリングの展開はご存じのとおりである。1970 年頃には総理府の予算が付いて、全国にパーマネントコースが設置され、最盛期にはその数は 600 を越えた。教育委員会を中心に各県にオリエンテーリング委員会が設置され、トップダウンの普及が始まった。1974 年には徒歩オリエンテーリングを中心とした 1 万人規模の大会が開催されているから、当時のオリエンテーリングの普及に携わった方々の精力的な活動が偲ばれる。

1970 年代後半から、競技的なオリエンテーリング大会が全国各地で行われるようになった。詳細は触れないが、歴史を紐解くと、徒歩オリエンテーリングと競技的なオリエンテーリングは別のルーツを持っていた。しかし、競技オリエンテーリングの集客力は乏しかったと考えられるから、多くの人に訴求した徒歩オリエンテーリングに参加し、それを面白いと思った人たちは、より難しい競技オリエンテーリングの競い合いに進んでいったのだろうと想像できる。

ジョギングブームが始まり、マラソン大会も大衆化が始まった時代だ。1970 年当時とは違う、市民スポーツの様相が現れ始めていた。そこから競技オリエンテーリングの興隆期がスタートした。

日本導入 50 年

オリエンテーリングの日本導入から 50 年がたち、市民スポーツの有りようは全く変わった。今や「苦しみ敬遠の大衆」（1970 年代の朝日新聞のある記事の見出し）は過去のものになった。トレイルランニングやナビゲーションスポーツでは、むしろ長い距離、厳しいレースが好まれている。苦しみの末に得られる向上や達成感を望む気持ちは、決して現代の専売特許ではないはずだ。だが、高度経済成長期が終わり、仕事の中で感じられる向上や達成感が薄らいでいることも、余暇の中に苦しみを乗り越えた達成感を求める人が増えたことと無縁ではないだろう。

学校教育も変わりつつある。日本の文化にとって協調性は欠くことのできない要素である。学校では「隠れたカリキュラム」の中で、日々「協調性」が強調されてきた。その一方で、少子

高齢化による国力低下の懸念や複雑化する現代社会は、21 世紀型能力と呼ばれる自主性、実践性をベースとする能力の育成を要求している。

50 年という歴史の流れで見ると、オリエンテーリングにとっての潮目は変わりつつある。僕が大学を出たころは、日本の文化風土にオリエンテーリングはなじまないだろうと思っていた。多分、根底では今もそうだと思う。しかし、21 世紀になってオリエンテーリング的思考方がより必要とされる社会状況が生まれつつある。オリエンテーリングのコアにある考え方は、その形成に寄与するものになるかもしれないという予感がある。

次の 50 年へ

さらに 50 年たったとき、「もし 1966 年にオリエンテーリングが日本に導入されていなかったら・・・」日本社会は随分と違うものになっていたかもしれない。そんな想像を楽しむための一歩がこれから始まる。



50 年近く前、日本独自の「徒歩」という形式と「国際方式」の共存の中で日本のオリエンテーリングがスタートした



次世代を担う若者たちに何を残し、伝えていけるだろうか（2015 年アジアジュニアユース選手権（香港）閉会式にて）